

特集

第42回日本自然災害学会学術講演会 スペシャルセッション ホンネで語ろう「ぼうさい」イブニング グカフェ『防災教育の現状と課題』

金井純子¹・井若和久¹

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行により、当学会の研究発表会がオンライン開催となるなど、会員同士が顔を合わせて意見交換する場が失われた。そのような中、オンラインで肩の凝らない、しかし、本質的な議論をできる場を作りたいという思いから『ホンネで語ろう「ぼうさい」イブニングカフェ』がスタートした。

	開催日	テーマ	世話人
第1回	2022年 6月23日	くまもとクロスロード研究会の実践と課題	九州地区 竹内裕希子
第2回	2022年 8月25日	子供たちへの防災教育と“モヤモヤ”	中国・四国地区 井若和久 金井純子
第3回	2022年 10月20日	本音で語ろう「これからの関西の防災」	関西地区 奥村与志弘 城下英行
第4回	2022年 12月20日	個人的なケアの経験と、ケアとしての避難学試論	中部地区 小山真紀 秦 康範
第5回	2023年 2月16日	知っておきたい災害保険の現状と今後	関東地区 大原美保 齊藤さやか
第6回	2023年 4月27日	復興のホンネー東日本大震災でのできごとー	東北地区 佐藤 健 佐藤翔輔
第7回	2023年 6月15日	炎上必至“自助中心主義対策にあえてもの申す”	北海道地区 高橋浩晃
第8回	2023年 8月24日	最近よく耳にする「災害ケースマネジメント」ってなに？	中国・四国地区 井若和久 金井純子

2. スペシャルセッションの趣旨

この取り組みをさらに盛り上げていくため、第42回日本自然災害学会学術講演会のスペシャルセッションとしてイブニングカフェを開催する運びとなった。テーマは『防災教育の現状と課題』である。第2回イブニングカフェの内容を踏まえて、防災教育に取り組む中で感じている悩みや疑問を皆で共有し、それらの課題解決につながるヒントや気づきを得ることを目的とした。

3. ゲストスピーカー

- 城下英行 関西大学社会安全学部 准教授
(専門分野：防災学習論)
- 秦 康範 山梨大学大学院総合研究部 准教授
(専門分野：地域防災、災害情報)
- 吉門直子 高知県土佐市立蓮池小学校 校長
(専門分野：学校の危機管理、安全教育)
- 金井昌信 群馬大学大学院理工学府 教授
(専門分野：災害社会学、地域防災、防災教育)
- 新家杏奈 東北大学災害科学国際研究所 助教
(専門分野：避難行動、防災教育)

4. 第2回ホンネで語ろう「ぼうさい」イブニングカフェ『子供たちへの防災教育とモヤモヤ』の振り返り

2022年8月25日に開催された第2回ホンネで語ろう「ぼうさい」イブニングカフェ『子供たちへ

¹ 中国・四国地区世話人 徳島大学

の防災教育とモヤモヤ』では、2名の講師に話題提供をして頂いた。

○松重摩耶 徳島大学環境防災研究センター 助教 「四国防災八十八話などの防災教育活動について」

○山本浩司 愛媛大学防災情報研究センター 特定教授 「事前復興の視点から学ぶ防災教育について」

また、指導者が抱える悩みや疑問(モヤモヤ)について参加者の方からたくさん共有して頂いた。それらを「防災教育の内容・水準・時間」に関する事、「防災教育の成果・評価の指標・方法」に関する事、「学校・教職員」に関する事、その他に分類した。

①防災教育の内容・水準・時間(8件)

- ・「防災の専門家」の知見が分かれる時、何を根拠として教育に取り入れるべきか迷うことがある
- ・エビデンスのないあやしい防災情報が多いこと、縦割り行政で省庁ごとに違う事を言ってる
- ・参加して楽しい防災教育イベントとはどんなものだろう
- ・学年、発達段階、学習経験に応じた内容となっているか
- ・どのような難しさの話をしたらよいか、わからない
- ・伝える事
- ・与えられた短い時間で、幅広い防災の何を知ってもらえばいいか、知ってもらえるのか
- ・短い時間では中途半端

②防災教育の成果・評価の指標・方法(6件)

- ・防災教育の成果をどのように把握するか
- ・成果指標をどのように設定するか
- ・子供の気持ちをデータ化する方法
- ・子供達の反応が明確でない
- ・どこまで理解してもらったのか? 確かめる手段が難しい
- ・出前講座を担当したがこれでよいのか自信が持てない

③学校・教職員に関する事(4件)

- ・教職員の温度差
- ・教育現場との認識のギャップ
- ・学校等が教えたい内容とこちらの理想が合わない
- ・学校教員に響いていない感じ

④その他(5件)

- ・小学校の低学年と高学年が混ざると難しい
- ・誰も真似できない、継続することのできない大掛かりな超優良事例を実践したり、誰も使わない防災教育マニュアルやテキストや授業案を大量に生み出すことに本当に意味があるのか
- ・関心が災害から時間が経つと減りがちなこと
- ・名前は防災教育なので仕方ないが、防災を教えることに特化しすぎ
- ・地震想定訓練で、教室に帰ってくる前提で何も持たず教室の後ろに整列する様子を見て、ランドセルは避難に邪魔なのだろうかと思惑に感じる

5. ディスカッション『防災教育の現状と課題』

司会：本日の司会は、中国・四国地区世話人の金井と井若が努めます。どうぞよろしく願いいたします。ゲストスピーカーの皆さんには、指導者が抱える悩みや疑問(モヤモヤ)の中から共感するものを1つ選んで下さいとお願いしたところ、城下さんは「教職員の温度差」、秦さんは「教育現場との認識のギャップ」、吉門さんは「成果指標どのように設定するのか」、金井さんと新家さんは「防災教育の成果をどのように把握するのか」を選ばれました。この後のディスカッションでは、共感する点も踏まえつつ、防災教育の取り組みの紹介や問題提起をして頂きます。では、最初に城下さんからよろしくお願い致します。



城下：関西大学の城下です。よろしく願いします。



最初の話題提供ということ、こういったイベントが初めての取り組みですので、どれぐらいの内容を話せばよいのか分からなかった、比較的マイルドな内容になっております。最近自分が直面しているモヤモヤをここで共有したいと思っております。私の中では、1回、2回防災の話をする講演のようなものは防災教育の中には入っていま

せん。もう少し長期に学校の先生方と関わりながら進めるようなものを防災教育として考えています。

今日は本音で語るということですが学校名は出せないで、バックグラウンドだけお話しします。場所は、大阪の高槻市というところで、私にとって非常に身近な場所です。高槻市は大阪北部地震がありましたけど、南海トラフ地震のようなとんでもない災害が差し迫っているとか、津波の危険性が高いとかというような所ではありません。ですがそうじゃないところでやる防災教育もやっぱり大事だと思うんですよね。むしろそういう所でできれば大抵の所でできるだろうなという問題意識もあります。X中学校とY中学校は非常に似通った中学校です。公立の中学校で、設立時期や学校の規模もだいたい同じぐらいです。きっかけは高槻市の教職員研修で私が話をした時に、X中学校のA先生が防災教育をやっていききたいということでコンタクトを取って下さり、ではできることをやりましょうということでした。この背景には、やはり大阪北部地震があったんだろうなと思います。学習内容は一年生がクロスロードをやったり、何か物珍しいことやっているわけではないんですけども、2018年は自分たちが地震を経験した年でしたので、子どもたちがクロスロードの問題を作ってみたりもしました。2019年からは進学した二年生がさらに高度なことをやろうということで避難所開設に取り組みました。やっぱり地域交流もやりたいという学校の希望もあり、地域の方々を巻き込んだイベントもしました。

X中学校では、2020年度にA先生がご異動されることになりB先生に引継ぎがされました。課題もありましたがなんとか乗り越え今も防災教育が続いている状況です。他方、Y中学校は一年遅れて防災学習を開始しました。一年生の内容はX中学校と全く同じで、二年生は学校の希望もあって少し内容を変えましたが、学習内容はほとんど同じです。2021年度にC先生がご移動になってD先生に引き継がれたのですが、C先生ほどは防災に関心がなかったようで、我々との防災学習は終わってしまいました。最初に申し上げた通

り学校の規模も立地条件も内容もほとんど同じなんだけども、こういうことが起こってしまうのは一体なぜなのかというのが私の問題意識です。

一方で、X中学校の引き継ぎを受けたB先生がやる気満々だったかというそうではなかったんです。この状況から、防災学習の内容と防災学習が続くかどうかは関係がないんじゃないかなと思ったんですね。A先生とC先生はすごく熱心にやって下さったわけですが、B先生とD先生は関心がなくて、Y中学校については我々との防災教育は終わってしまいました。じゃあX中学校とY中学校で何が違ったのかを考えた時に、X中学校のA先生は、他の先生を強引と言っていいぐらい巻き込んでいたんですね。例えば、放課後に今日の授業の振り返りをするので学年の先生に集まってもらうとか。X中学校は会議や打ち合わせ等がとても多い学校で先生方は非常に時間がない中でも、誰かは必ず振り返りに出ましようという形を取っていましたので、A先生以外も防災学習の状況を把握していました。A先生が異動された後もそういうものだろうということで、振り返りは継続していました。

Y中学校のC先生は我々のことを歓迎して下さっている感じで、振り返りは基本的にC先生が中心となって、今日の授業はどうだった、次はこうしたらどうでしょうかという形でやって下さいました。ときたま学年主任の先生がちらっとくるような状況でした。後任のD先生は振り返りはせず、早く終わらしましようというような様子でした。同じことを同じような状況でやっても随分と反応が違うなど、とてつもなく大きな温度差を感じたのがこの二つの学校の事例でございます。

これをどういうふうに課題解決できるかということ考えると、防災を特定の熱心な先生の取り組みにしちゃうと、やっぱり難しいなと思います。防災を学校としての取り組みテーマにできるかどうかということですね。防災教育の中身はあまり細かいことは気にしないでいいような気がしています。小学校で毎年違うテーマでやっても十年以上ずっと続いている所もあります。具体的な

テーマがこうだからというよりは大きな意味での防災を学校のテーマにしましょうと言えるかどうか、非常に大きな問題じゃないかなと思います。それから、防災学習は、総合の時間を使うことが多いです。環境の方が大事じゃないか、国際理解が大事じゃないか、福祉が大事じゃないかというふうに、限られた時間の取り合いになってしまうところもあると思います。他のことに関心がある先生方に、防災って意味がありますよ、とどういうふうに示していけるかがポイントで、そういう意味では防災がカバーする範囲は、単に災害起こった時にどうこうっていうものだけではなくて、もう少し幅広い学び、リソースですよ、と伝えられるかどうかっていう所にかかっていると思っています。ということでだいたいぶすっきりしましたので、マイクを渡したいと思います。

司会：ありがとうございます。続いて秦さんお願いします。

秦：山梨大学の秦です。よろしくをお願いします。



この写真は、昔、学校で行った避難訓練の様子です。休み時間の図書室です。子供たちは図書室で一番危ないと思われる本棚の前にいます。机の下に入ろうとしています。椅子がなくて入れないといった状況です。私は東日本大震災の後からこの小学校の防災教育に関わるようになりました。アドバイザーとしていろんな学校に関わり、散々やり尽くしたなという思いがありますが、やっぱり徐々にやらなくなるというのを経験しています。「実践的な防災訓練 パターン化した避難訓練からの脱却」という動画を Youtube に上げています。2018年に18,000回以上再生されています。「抜

き打ち避難訓練」は、校庭で緊急地震速報が鳴ると子供たちが校舎の中に戻ってしまうというちょっと衝撃的な動画です。これは8万回以上再生されています。ご存じない方はぜひ見てください。動画を上げた理由は、私の話を直接聞いて納得した教師が自校で提案しても他の教師を説得できないということがありまして、私が直接言うことに意味があるんだと思ったからです。かといって全ての学校に関わるわけにもいかないので、このような動画で伝えています。

これは今年の1月11日の神戸新聞の記事で、「訓練やったふり、やめませんか」という結構ショッキングなタイトルです。私もコメントさせて頂きました。ヤフーニュースにも載りまして結構コメントが付きまして。あんな訓練に意味は無かったなど9割ぐらいは批判に同調するようなコメントが多かったです。逆に学校の教師と思われる人からは肯定的な意見が記入されていました。パニックになったらどうするんだとか。私自身は、防災訓練を教師が子どもを管理する目的でやっても意味が無いと思っています。子供の安全を確保するという観点からは、現状、子供のためにも教師のためにもなってないです。応用が利かない、基本ですらない、こういうふうに思っています。釜石の奇跡は従来型の訓練をやったおかげかというところと全くそうではありません。校庭に集まる訓練を繰り返せば大川小学校の悲劇を回避できるのかというと当然回避できません。あと、沿岸部において「おはしも」を守ると確実に死にます。ですからやはりちょっと違うのかなと思います。実は私は子供時代に「おはしも」は習っていません。調べてみると、阪神淡路震災以降、消防庁による教育安全指導のガイドラインにも紹介されたことで、急速に全国に広がったようです。学校の避難訓練の教材として開発されたものではなく、元は映画館や地下街の火災を想定した用語です。ですから、特定の子供が集まる学校ではなく、不特定多数の人が集まる場所を対象にしたものだということですね。やっぱりこれも子ども管理しやすいということで広まっているんじゃないかと思っています。

この写真は、阪神淡路大震災の震度7にあった

実際の高校の廊下で、壁が落ちて什器が倒れて粉々になっている様子です。今の避難訓練は全く被害が起きない、誰も怪我をしない、これが前提になってるんですね。こんな状況になったら「おはしも」もへったくれもないです。本当はこういうことがあり得るんです。山梨県内で行われている避難訓練が、私の子供時代と何も変わってないことに衝撃を受けました。20年以上経っても進化しないとすることなんです。校長の講評もパターン化されてます。時間を測るのも型にはまっています。走っちゃいけないって言ったのになんで時間を測るのだろうと思いますね。あと私語をしたから災害で人が亡くなったなんて聞いたことないですよ。これをいくらやっても防災には効果がないし、そんなことは体育でやって下さいということです。結局のところ、年に1回は避難訓練をしないといけない、やるのが目的になってるんですね。

文科省は東日本大震災の後、防災教育の狙いを示しています。「災害に対して的確な思考判断に基づく適切な意思決定や行動選択ができる」、「危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動ができるようにする」こういうことを求めています。しかし、従来型の避難訓練を100回行ってもこうした狙いは到底達成できないのです。そこで、緊急地震速報を活用した訓練を提案しました。授業中ではほとんど差がなかったのに、休み時間や掃除の時間など教師が近くにいる状態で訓練しました。すると、色々な課題が出てきました。私が、先生も身を守って下さいと言っても窓を開けたりします。地震の時はそんなことはできません。もう一つは、訓練のやりっぱなしだと意味がないので、気づきを重視した振り返りをやりましょうとお願いしています。分かったことは、子供達にとって避難訓練は机の下にもぐることなんです。ですから、校庭に居るのにわざわざ自分の教室に戻ってくるというような事が起こります。あと、緊急地震速報を聞いてもすぐに適切な行動を取ることは難しいということ、状況に応じて適切な身を守る行動を取る応用力がほとんど養われていなかったことも分かりました。私はいつも学

校の先生に「失敗しない訓練がいい訓練ではありません。課題が見つかる訓練は良い訓練ですよ」と申し上げます。消火器の使い方とかであれば失敗しない方がいいですけども、学校の避難訓練はそうじゃないはずなんです。一発OKの訓練だったらやらなくても良いということになります。なぜこれにこだわるかという、私自身も防災訓練が例えば地域の人が週末に集まる機会として機能しているのであればある程度なあなあの訓練でもしょうがないかなと思っていたのですが、あの東日本大震災でご存じのとおり、いい加減な訓練をすると人が死ぬんだということが分かりました。それで、適当な訓練にしちゃいけないという思いが強くなりました。

「おはしも」に対して、片田先生が提唱されている「津波避難三原則」というものがあります。この二つは全く似て非なるものです。「おはしも」はダメなことが標語になっています。走るなどかしゃべるなどか、しちゃいけないことですね。一方、津波避難三原則は、想定にとられるなどか率先して避難せよとか、どうすべきかが標語になっています。どちらが危険予測、主体的行動に資するかは一目瞭然です。何を教えるべきか、結局一番大事なことは「自分の身を守る」ことです。机の下に潜ることは手段ではないのです。あと、学校に居るのは一年間で2割ぐらい、つまり8割は学校じゃないところで被災するわけですね。それなのに、学校の中のしかも授業中を前提とするのはかなり狭い範囲です。頭を守る動きを身を守る手段にしてしまうと津波対策には全くならない。ダンゴムシのポーズもそうですね。地震は「いつ」「どこで」発生するかわからないので、「いつどこで地震が起きても良いように準備しておく」必要があります。そう考えれば、危ない家具は事前に固定しようという話になります。抜き打ち訓練はこのための手段の1つなのです。これをやるのが結果的に文科省の狙いを達成できると考えております。

これはダンゴムシのポーズというのは本当に安全であるのかという問いです。防災教育学会の諏訪氏は、ちょっと残念な防災教育として、ダンゴ

ムシのポーズと新聞紙のスリッパをあげています。本当に安全かどうかエビデンスがないんですよね。防災頭巾もです。首をむき出しにするのでかえって危ないという意見もあります。私も意味がないと思います。これ学校現場以外で全く使われてないのですがなぜか学校現場で普及しています。子供騙しと言わざるを得ない。頭部保護が目的であればヘルメット一択です。

こうしたガラパゴス化した防災教育を変えたいのですが、残念ながら期待できません。学校現場は、防災を専門とする教師は不在、さらに昨今問題となっている多忙な中で余裕がない。残念ながら、前例踏襲を大きく変えることは期待できないと思います。災害防災分野の学会が主導して、防災教育の現状を本気で変える提言を行う必要があるのではないのでしょうか？それが私の提案になります。

司会：秦さん、ありがとうございます。ではフリートークを少し挟みたいと思います。吉門さんは教育現場で防災教育を熱心にやられていると思いますが、城下さんや秦さんのお話を聞いて率直にどのようなご感想を持たれましたか？

吉門：お二人がおっしゃった通りですね。私は文科省で調査官をしていましたので、ご指摘の課題は行政として重々認識はしております。ただ、そういう学校現場ばかりではありません。では、なぜ、今そうなっているのでしょうか？東日本大震災から10年経った今なのか、というのが私の率直な感想です。学校での防災教育が進まない理由としては、何が正解で、どうしたらいいのか端的に分かりやすく知見が示されていない、そもそも、防災行動に関する専門家の知見が分かれてしまっている現状もあると思います。なぜ知見が固まらなかったのかというのが率直な疑問です。

司会：ありがとうございます。吉門さんから、今まで何をしてたんですかと言われたような気がしますが、秦さんいかがでしょうか。

秦：はい。文科省は専門家を入れた議論もして報告書も出しています。生きる力という分厚い本も出していますが、かなり抽象的なことが書かれています。基本的には、細かいこと具体的なことは国が示さず、県・市町村、個々の学校に任せられているんですね。都道府県ごとの教育委員会で、いろんなものが作られていて統制されていません。東京都の教育委員会だとお金もあるからすごいのを作っていて、私が言う標語の防災教育が散々されます。現場の教師も標語を教える方が楽なんですよね。保育園ではダンゴムシのポーズを教えやすいんですね。ですが、地震というダイナミックな現象にダンゴムシのポーズでじっとして本当に意味があるのかと思うわけです。海外だと建物が弱いので建物の外に出ることが重要なんですけど、日本人は建物の外には出ないですね。状況によって対応が変わるということを本当は教えてほしいんですけど、マニュアル化、固定化されています。皆さんも「おはしも世代」だと思いますけど、それが当たり前だとしみついていませんか。ですから、たしかに今更なんですけど、学会側から変えないと変わらないのかなと。もう一つは、文科省がホントは具体的なものを示さないとなかなか広がらないかなと感じております。

司会：城下さんはいかがでしょう。専門家は何かをしていたのかという吉門さんの疑問に対してご意見どうぞ。

城下：なかなか難しいですね。今のお話を聞いて思うのは、そもそも防災教育が指し示す内容が人によって違うなと思います。秦さんが強調されているのは、学校管理下において子供たちが怪我をしない安全管理を強調されたように聞こえました。他方で、防災教育の取り組みは、学校に居る間の行動もちろんありますけれども、そうでない時にも広げていくことが大事だと思っております。学校で防災教育をやるとうとうもそうならない傾向がある感じがします。例えば、家庭の防災は、それぞれ家庭の事情があるから介入しにくいんです。私が一番大事だと思うテーマは「(学校)

じゃない」ところでやるということです。それも防災教育が進まない一つの原因になってるような気はします。

司会：ありがとうございます。続いては、防災教育の成果・評価・指標方法に関するに移っていきたいと思います。金井さんと新家さんは防災教育の成果をどのように把握するのか、吉門さんは成果指標をどのように設定するのかというモヤモヤに共感すると選んでいただきました。それを踏まえてご自身の取り組みをお話頂きたいと思います。では、吉門さんからよろしく願います。

吉門：高知県土佐市立蓮池小学校で校長を務めております吉門と申します。よろしく願います。



「防災教育の現状と課題～学校の立場から～」というタイトルでお話します。教育委員会や文科省が示している安全教育のコンセプトは自分で考えて行動するということが中心になっています。東日本大震災の前は、防災教育＝避難訓練という実態が多くみられました。そうではなくて、子供たちが自ら考え行動できるようにしようという方向性が強く押し出されました。でもそうすると何を教えていいかわからない、資料がない、こういった声が学校から聞こえてきました。そこから、マニュアルや防災教育の手引きを作成するなど、学校現場の課題を一つ一つ解消し、防災教育を推進してきました。

学校における避難訓練は、消防法、学校保健安全法、学習指導要領の意義や目的を踏まえて実施されています。もう一つは学級活動として安全行動を考えます。それから安全教育の目標は、安全に関する資質・能力を育成していきましょう、生

涯にわたって自分たちの安全を実現できるようにしましょう、というものです。本校では、全ての教育活動を使って防災教育を行っています。今の学習指導要領は東日本大震災を経て改訂されたものであり、安全教育、特に防災に関する内容が各教科や特別活動等で明確に記述されています。例えば、災害の科学的知見に関するものは理科などで基礎に触れることができます。社会科や他の教科等でも防災を学ぶ場面は充実されています。一年間の様々な教育活動を連動させながら、力を身につけようという流れになっています。このようなものを学校安全計画といまして、安全教育の内容を一覧にまとめて見える化しています。この計画の一番下には、地域と連携した取り組みや、教職員の研修を必ず入れることとなっています。

これは昭和50年台風5号の時の写真です。本校周辺はこのような状態になりました。災害の種類の中で課題があるのは水害です。南海トラフ地震による津波については、本校は新水槽の区域の外にはありますけれども、可能性は0ではないと思っております。こうしたことから、本校では「自ら学ぶ力を身に付け、生き抜く力を育む～気づき・感じ・伝え合うことを大切にした安全教育の日常化～」を研究主題にして取り組んでおります。先ほどから出ております安全管理としては、災害等の危機事象に際して、いかに子供たちの安全を確保するか、教職員が行うものが安全管理です。そのための予告なしの避難訓練では、担任にも日時を連絡せずに行います。揺れが収まった後、安全確認・点呼をするのですが、あらかじめ何人か児童に図書室やトイレ等に隠れているように頼んだりもします。また、点呼の場面で余震が発生したと伝えるようなこともやっています。

安全教育としては、高知県が作成し全教職員に配付している「高知県安全教育プログラム」活用しています。これには、育成をめざす安全に関する資質・能力の一覧表をはじめ、具体的な実践方法も含め、何をどう教えるかが書かれており、小学生の低学年から高校生まで対応しています。子供たち自らが気づき、考えるということを一番大事にしています。具体的には、小学5年生は、気

象災害への備えをテーマとして、線状降水帯発生時の避難に注目したマップを作りました。六年生は、教科や総合的な学習の時間の中で防災について考えました。国語では短いストーリーの防災小説を書きました。小説は希望を持った未来で終わります。子供たちがこれまでの学習の中で強く意識に残っていることが小説の中に表れます。安全教育によって何が意識づけられているかを読み取ることもつながります。防災小説の冊子は市長さんにも報告し、子どもたちが思いを伝えています。また、地域をはじめ、国、県、市の様々な関係機関にご協力いただき防災を体験的に学ぶ「防災1 DAY キャンプ」や、家族防災会議といった取り組みも行っています。

こうした安全教育の成果を確認する方法の一つとして子供たちにアンケートを行います。アンケートではどの子も肯定的な回答がありますが、実際に行動ができていないのかを見取っていくことも必要です。こうした安全教育の効果をどのように測るか、これからの課題として今悩んでいる所です。

まとめです。安全教育は、いろんな手法の開発や指導の改善を考えることも大切ですが、一番は子供たちに何が身についたか、ということです。子供自身が自分で安全な行動を選択することができる、そういうことを実現できる安全教育モデルとして取り組んでいきたいと考えております。

これは、9月1日の全国一斉訓練に合わせた予告なしの避難訓練の際に撮った全クラスの映像なのですが、タブレットを使って各教室の状況を職員室のモニターで見られるようにしました。訓練の時間は授業中でしたが、どのクラスの反応が早かったか、また、教師の動きなども職員室ですべて把握することができました。これはとてもよかったので、次回は休み時間に実施にし、体育館や廊下などにもタブレットを置いてみたいと思っています。その他、PTA学年行事の機会に保護者と一緒にプールの水を浄水して、 α 米のごはんを作ってみるといったこともやっています。

安全教育の目的は、子供たちが、どんなときでも自分で生き抜くことができるよう、必要な知識

と行動力を身に付けること、そして行動選択で迷ったときは安全を優先する子供たちを育てていくことが重要だと思っています。

しかし、学校だけではこれは実現できません。専門機関や研究者の皆様のご指導を頂きながら、地域・保護者と連携して進めていくことが大切です。こうした安全・防災教育をもっと広げていきたいと思っています。以上です。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。続いて金井さんよろしくお祈りします。

金井：群馬大学の金井と申します。よろしくお祈りします。



私だけかもしれませんが、小中学校で防災教育をするのはとても楽しいです。みんな授業を真面目に聞いてくれるし、終わった後も質問をしに来てくれたりするんですね。そこにどっぷり浸かってしまっている自分をいつも戒めないと研究者として終わるなと思っております。その一方で、防災教育のツールを作ることに特化している人もいますが、どれほど使われているのかなど。実際には全然使われていないんじゃないかと思います。そんな中、自分は何をしようかと考えた時に、地に足つけて、できていないことをしっかりと改善しないといけないんじゃないかと思って頑張りをはじめました。先ほど秦さんが話した地震の避難訓練もそうですが、今のままやったら、ろくでもないことになるって分かっているのにまだ続けている。とにかく、失敗することを恐れる現場の教師がいるのがよくないですね。

さらにいうならば、防災教育って保護者を巻き

込まないと全く意味ないはずなんです。風水害の時、山はいきなり崩れないし、雨が降っていきなり川は増水しない。必ずその時まで時間があるので子供のそばには保護者がいるはずなんです。つまり、学校で防災教育を受けても、親がまだこのくらいなら大丈夫だろうと言えばもう逃げないと思います。それで、私は保護者を巻き込む授業展開を取り入れ始めました。難しいことしないで、授業参観で保護者と子供と一緒にいろんな災害について考える、気づきだけを与える授業をしようという話です。また親子で参加する防災キャンプも実践しています。避難所生活を想定した体験学習を通じて、みんなで助け合い、他者を思いやることを学ぶ内容です。

最後にもう一つ私が気になってことは、教育効果をどうやって測るのかについてです。研究論文の中には、「楽しかった」「ためになった」という子どもの感想を根拠として、「私のやった実践は効果がありました」と報告しているものがあります。本当でしょうか？ それで本当にいいんでしょうか？

最後の最後に、「浮気を許せますか」と皆さんに聞きたいです。それぞれの地域、それぞれの学校で、お抱えの先生がいたりしませんか。かなり挑戦的な話をしていますが、これが問題だと思っています。基礎科学の実験では再現性が必須ですが、防災教育はそれをするを許してくれません。例えば、ある大御所の先生がある地域の防災教育の面倒を見ている、でも効果が「？」だとします。それならば、「おれが変えてやろう！」と思っても、その地域には絶対入れないんです。許してくれないんです。私は浮気ウェルカムです。声をかけてくれた方が、私のことを「ちょっと違うな」と思ったら、気兼ねなく私を切れるように、いつもこうやって好き勝手なことを言います。ぜひご意見いただければ幸いです。ありがとうございます。

新家：東北大学災害科学国際研究所の新家と申します。今年の3月に博士課程を卒業した駆け出しの研究者です。



今まで防災学習のお手伝いをしていました気仙沼市鹿折中学校の事例から私を感じたことを話したいと思います。伝えたいことは、長期的・継続的な防災学習が必要だという点と、継続的な取り組みをしていく上で重要な評価の指標について問題提起したいと思います。

まず、鹿折中学校の防災教育の始まりは、2020年に赴任した校長先生です。「東日本大震災の記憶がない生徒が入学してくる、地域で何があったのか知って、語り継いでいかないといけないといけない」という強いお考えをお持ちでした。これを受けて、地域の人からお話をきくことから防災教育を進めていきました。テーマは、大島・鹿折地区震災伝承 聞く・学ぶ・共有する『～未来の命を守る「あの日の大島・鹿折」の伝え手として～』としました。総合学習の時間に探求学習の一環として実施し、複数名の先生たちがグループになって授業の運営をしていく形になりました。この校長先生の強い思いと、運営がグループで行われているという点は、継続性を保つキーになっているのではないかと考えています。手法は、地域の方をお呼びして、東日本大震災でどういう思いをしたのかをお聞きし、分析、発表するといったシンプルなものです。

調査方法は、学習直前、学習直後と学習から9か月後に質問し、結果を比較しました。効果を明らかにするために、手法を利用しない探究学習を行った階上中学校での質問紙結果と比較しました。「災害時の生きる力」を指標にして Pre-Post の比較をしました。グラフが右側に出ていると力が伸びているということになります。一方で、介入効果がどれだけ継続しているかをみる Post-Delay の比較では、信念を貫く力、きちんと生活する力

が低下、その他の力は学習効果が持続していました。

つまり、生きる力というものは持続～低下していくものであると考えられます。こういったことから、継続的な防災学習が必要であると言えます。継続的な防災学習が必要であるということは、私のデータからも各先生方の研究からも分かるかと思えます。しかし、継続的に物事を続けるのは大変です。この学校の場合は、現場のニーズを満たす活動をしている点、地域が学習を応援する仕組みが作られている点が顕著に効いているのではないかと思います。このように現場のニーズを満たすことができれば、現場の教師もやる気になって下さるんですね。つまり、研究者のやりたいことを押し付けないということがかなり大事です。地域が自走して学習を運営する仕組みづくりは、研究者が参加しているからできるというのではなくて、運営側の教師と繋がっているグループの人数が多ければ多いほどうまくいくことが多いですし、担当の先生が異動して活動が終わってしまうという事態をできるだけ避けることができます。

継続的な防災学習を研究する上での課題としては、長期的な学習を評価する手法・指標づくりです。特に、Pre-Post比較を長期的な防災教育に使うと、かなりやっかいなことになってしまいます。具体的には、一年、二年といった長期的な学習効果を計測する場合、日常的な学習や経験、人としての成長などの要因が含まれてしまうと思います。介入が入る直前よりもっと前にアンケート調査を行い、ある程度の子供の能力のデータを取って、介入がない場合の仮想データのようなものと比較できないかと考えています。まとめますと、長期的な防災教育が大事です。トレンドにもなっています。しかし、それを分析する手法というものがいまだに提起されていないというのが課題です。ぜひこの場でご意見いただけると嬉しいです。

司会：ありがとうございました。金井さんの話はなんだかお腹が痛くなりそうでした。では、フリートークを始めていきたいと思います。金井さん、吉門さんと新家さんのお話を聞いていかがで

したか。

金井：新家さんにお聞きしたいです。学校の年間行事で子供達は変わるんですよね。例えば、運動会の前後で体力がバツと上がったり、合唱コンクールでクラスの結束が一気に高まったりとか。おっしゃっていたように、長期的な効果計測ではそれを含んでしまうことが難点だと思いますが、むしろ、Delay、後ろで測ることに特化して、この一年間で子供たちがこの指標でこれだけ成長しましたとした方が分かりやすいと思います。研究者はボンと背中を押すぐらいの感じ。評価に教師からのヒアリング結果も合わせれば教師のやる気も上がるし、別の視点あるんじゃないかなと思います。

新家：そうですね。金井さんがおっしゃった学年の最後に評価するという事は、その子のベース自体がどれだけ上がったかを考慮するという事で、そちらの方がやりたいことにマッチするなあと思ったりしたんですが、やはりこの分野では、介入が無かった場合とどのくらい違うのかが評価ポイントになってくると思うので、統計的な手法でやっていこうと思っています。教師にヒアリングをするのも良いと思います。正直いうと指標は調べたい内容によっても変わってきますので。両方やってみたいなと思いました。ありがとうございます。

司会：次は城下さんいかがでしょうか。

城下：防災教育を受けても3年ぐらい経つと忘れてしまいます。単純に、忘れないために継続的に活動を行っていくというのにも大きな意味があると思います。吉門さんに質問です。学校で防災に取り組まれている中で、〇〇計画と名の付くものが多すぎて大変なのではないでしょうか。ある学校では、年間に校長の名の下で30件もの計画を策定しているそうです。そんな状況の中で、防災に力を入れている学校はいいと思うんですが、そうでないと管理が追いつかないんじゃないかと思っ

ております。そのあたりはどうお考えでしょうか。

吉門：ご指摘の通りです。学校には校長の経営計画というものがああり、教育活動全般にわたる計画を立てます。そこには、学校の独自性があり、この計画にきちんと位置づいていることが大事です。学校の教育活動のすべてを「安全・防災」に引き寄せて実践することで充実させることができるっています。カリキュラムマネジメントとよく言われますが、安全・防災こそ、こうした視点が必要です。

今、教員の働き方改革なども言われます。一方で〇〇教育として、学校には様々なことが求められています。全てを学校教育だけで完結することは難しい。生涯にわたって、安全・防災を考えて実行できるような教育と社会全体のかかわりも大事だと思えます。

城下：防災を引き寄せるとおっしゃってましたが、人権に引き寄せられるかと言われると引き寄せられる、国際理解、福祉でも同様です。背骨の部分はなんにでも置き変えられてしまうのが難しいところだと思うんですね。それに、校長先生が何を背骨にするか決めてしまうことができる。それで偏ってしまう。これが防災でなくてもなんでもいけてしまうという問題になっているのかなあと思いました。

吉門：おっしゃる通りです。しかし中身が大切です。行政が決めても、学校での実践が伴わなければ実現は難しくなります。大阪府高槻市が市全体で方向性を持って取り組まれていることも承知しています。学校が、校長のリーダーシップのもとでしっかり取り組むことが重要だと思えます。

秦：金井さんに質問です。防災教育、最初はみんなりべらるにやるんですけど、先生！先生！と呼ばれるようになると、ちょっとおかしくなっちゃうとか。研究者は自分を戒めるべきといういうご指摘がありました。どうしたらいいのでしょうか？

金井：難しいですね。自分のやり方が全て正しいと思ってしまうのは駄目ですね。「このやり方がいいと思えますけど、改善するためにはこれがいいんじゃないですか」といった言い方は良いと思えますが「こういうことをやりたいんですけど他の先生紹介してくれませんか」と言ったら大学の研究者に切られるというようなこともあります。

秦：防災教育の継続については教師の人事異動の影響がかなりあります。防災教育を突き詰めるには、その地域に特化した話をしなければいけません。が、そもそもそこで生まれ育ってないし、そこに住んですらない人も多います。どうやって地域に特化した防災教育をやるのか、構造的に無理があるんですね。こういった問題に対してどなたかお考えを教えてください。

新家：気仙沼市の中学校では、地域性を大切にするためには地域住民を集めることがキーになっています。教師が住民の話を生徒と一緒に話を聞くことで、地域のことを知れて良かった、勉強になったという効果が見られます。

秦：地域の人というのはどういった人を呼ぶのですか？ その方々は学校とのネットワークがあるのですか？

新家：地元の商店街の方々、来てくれそうなおじさんやおばさんです。ネットワークがある方もいらっしゃるし、地域に密着している教師とのつながりもあります。色々なつてを使って、教師が地域を知るきっかけをつくっています。

吉門：そこも課題ですけれども、東日本大震災では地域の方と一緒にいたときに被害に遭ってしまった事例もあります。一生懸命防災教育を実践した結果、子供たちと適切に避難することができたという事例もあります。本校としては後者を目指しています。教師が勉強しないと児童に教えられませんからね。

司会：皆様ありがとうございました。それでは井若さんに総括をお願いします。

井若：総括を担当します井若です。たくさんの方の気付きを頂きました。ありがとうございました。



キーワードは3つあったと思います。1つ目は「防災教育を包括する」です。学校ならではの組織的な課題や長期的・継続的に取り組む必要があるといったお話が印象的でした。2つ目は「エビデンス・アップデート」です。避難訓練などまだまだ慣習で終わっているところもたくさんあるので、文科省や学会がアップデートしていく必要があるといった指摘に共感しました。3つ目は「自戒」です。防災教育に関わる私たち自身が、もっと謙虚に、そして現場に寄り添う必要があるのではという問題提起にハッとさせられました。事実、学校の教師は多忙で、意識は「いざ」よりも「いま」になっています。プレイヤーだけではなく、伴走していく支援者になることも必要だと思いました。

本日は長時間にわたり、ゲストスピーカーの方々、会場でご参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。皆様に感謝を込めて拍手で終わりたいと思います。(拍手)